

## 古文書修復実習

日時 2019年3月10日(日) 10:00-17:00 3月11日(月) 9:30-16:30

会場 神奈川大学横浜キャンパス 3号館地下2階 日本常民文化研究所古文書修復室

講師

関口博巨(日本常民文化研究所所員)

田上 繁(日本常民文化研究所客員研究員)

白水 智(日本常民文化研究所客員研究員・中央学院大学教授)

山口悟史(日本常民文化研究所客員研究員・東京大学史料編纂所技術職員)

内容 基本的な古文書修復技術の説明及び実習 ①現状の記録・解体 ②修理(繕い・裏打ち)  
③復元(化粧裁ち・製本) ④襖や屏風などの下張り文書の剝離の工程実習

## 古文書修復実習を終えて

関口 博巨

2019年3月10日(日)・11日(月)の日程で、第22回となった常民文化研究講座「古文書修復実習」を開催した。応募者が定員を大きく超過したため、抽選によって受講者20名を決定した。

今回の実習では、例年のとおり、修復の基本となる①記録・解体→②修理(繕い・裏打ち)→③復元(化粧裁ち・製本)の3工程と、これに加えて④襖や屏風などの下張り文書の剝離作業を盛り込んだ。受講者は5名ずつ4つのグループに分かれ、各工程の技術内容をそれぞれ半日ずつ実習した。

「①記録・解体」部門は、修復前の古文書の寸法や傷み具合などを記録し、②の作業に備えて古文書を展開・解体する工程である。この部門では、あわせて古文書の調査・整理・保存(現状記録や目録データベース化など)、そして文化財レスキューの方法についても説明・提案し、その実践的な内容が好評であった。



写真1 記録/古文書の撮影方法の実習

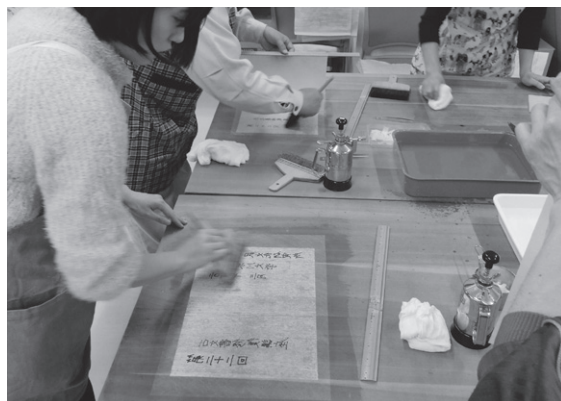


写真2 修理/裏打ち。和紙を裏から張る補強



写真3 修理／裏打ちした本紙を仮張りに張る



写真4 修理／繕い。欠損部分を補修紙で裏から埋める



写真5 復元／化粧断ち。余分な裏打ち和紙を裁断



写真6 剥離／襖の下張り文書を剥離



写真7 剥離／剥離した本紙を毛氈上で乾燥



写真8 会場風景

「② 修理」部門は、繕いや裏打ちなどの技術をつかって、傷んだ古文書を補修・補強する工程である。もっとも古文書修復らしい体験ができる工程だが、受講者の皆さんは、慣れない和紙・正麩糊・刷毛などの材料や道具の取り扱いに苦労しておられた。

「③ 復元（化粧裁ち・製本）」部門は、裏打ちの和紙部分を整え（化粧裁ち）、製本の仕立て直しをして、もとの形にもどす工程である。製本に必要な「こより」作りの技術は、史料取り扱い機関での業務や、古文書調査の際にも役立つことから、皆さん熱心に練習され、全日程終了までに技術をマスターした方も多数おられた。

「④ 剥離」部門では、下張り文書の剥離技術を体験していただいた。古い襖や屏風には古文書が下張りされており、近年その史料的価値が見直されている。とはいえ、各地の史料所蔵機関でも、その取り扱いには難渋しており、参加者の皆さんは剥離の手順や技術を熱心に吸収しておられた。

言うまでもなく、古文書修復の技術は簡単に習得できるものではない。そのため、今回の実習の修理部門と復元部門では、和紙で作った疑似文書を練習台とした。初心者が本物の古文書を使って修復の練習をしようものなら、古文書修復ではなく古文書破壊という、本末転倒の結果になりかねない。実習を修了した受講者の皆さんには、学んだ技術を本物の古文書で試す前に、まずは疑似文書で十分に練習していただきたい。

終了後のアンケートによると、受講者の多くは学芸員・文化財担当者・図書館司書などであり、実習での経験は日ごろの業務や外注先との打ち合わせに大いに役立つと、異口同音に述べておられた。またこの実習が、全国各地から参加される受講者同士が知り合い、それぞれが抱えている業務上の課題などについて意見交換できる場にもなったという。日本常民文化研究所としては、こうした関係が一時的なものに終わらぬよう、参加者の皆さんを結びつけるネットワークづくりをしていくことが必要であろう。

最後ではあるが、この実習を準備・開催するためには、歴史民俗資料学研究科の大学院生アシスタントの存在が不可欠である。彼らの膨大な量の作業と気遣いなしに、実習を円滑に進めることはできない。大学院生アシスタントの皆さんに心より感謝の意を表したい。